片岡良一著作集

第六巻

中央公論社

片岡良一著作集　第六巻
定価二二〇〇円
昭和五十四年十月十五日印刷
昭和五十四年十月二十五日発行
著者　片岡良一
発行者　高梨茂
印刷者　山田博
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―八―七
電話（五六一）五九二一―九
振替東京二―三四
©一九七九　検印廃止

片岡良一著作集　第六巻　日本浪漫主義文学研究

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

日本浪漫主義文学研究
はじめに　九
第一章　前浪漫主義の人々とその周囲　一三
第一節　近代日本文学成立の契機　一三
第二節　悲劇的作品の氾濫　一七
第三節　悲劇の典型をめぐって　二六
第四節　探求の限界　四一
第五節　狂飆時代の端緒　五四
第六節　逃避的傾向への逸脱　六七
第二章　尾崎紅葉と幸田露伴　八三
第一節　出発期の紅葉　八三

第二節　西鶴への関心　九四
第三節　開眼から一応の円熟へ　一〇七
第四節　後期の動揺と紅葉作風の尊ぶべき基調　一三三
第五節　前期の露伴　一四九
第六節　後期の露伴　一六七
第七節　周囲への瞥見　一八一
第三章　浪漫主義の成立　一九一
第一節　浪漫主義の諸特質　一九一
第二節　北村透谷　二一〇
思想的立場と平和論　文学論史上の位置　作家としての世界
第三節　透谷の周囲と同時代の人々　二五二
「文学界」の人々　同時代に出発した人々
第四章　浪漫主義の展開　二六二
第一節　「滝口入道」と高山樗牛　二六二
第二節　泉鏡花　二六六

第三節　一九〇一年前後の文学　二九九
重大な転換期　明治初年以来の歴史への瞥見　浪漫主義思潮を中心に　前期自然主義と社会主義小説

補論

一　国木田独歩「武蔵野」　三三七
二　巌谷小波の少年文学　三四一
三　鏡花の鬼神力　三四八
四　子規と明治文学史　三五六
五　「落梅集」の境地と島崎藤村　三六五
六　「舞姫」と「普請中」の距離　三八七

編集後記　三九三

日本浪漫主義文学研究

はじめに
第一章　前浪漫主義の人々とその周囲
第一節　近代日本文学成立の契機
第二節　悲劇的作品の氾濫
第三節　悲劇の典型をめぐって
第四節　探求の限界
第五節　狂騒時代の端緒
第六節　逃避的傾向への逸脱
第二章　尾崎紅葉と幸田露伴
第一節　出発期の紅葉
第二節　西鶴への関心
第三節　開眼から一応の円熟へ
第四節　後期の動揺と紅葉作風の尊ぶべき基調
第五節　前期の露伴
第六節　後期の露伴
第七節　周囲への瞥見
第三章　浪漫主義の成立
第一節　浪漫主義の諸特質
第二節　北村透谷
第三節　透谷の周囲と同時代の人々
第四章　浪漫主義の展開
第一節　「滝口入道」と高山樗牛
第二節　泉鏡花
第三節　一九〇一年前後の文学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに

日本近代文学における浪漫主義の成熟期は明治三十年代初葉であるが、それに先駆する動きは、二十年代初葉の近代文学成立期に求めることができる。それゆえ、まず最初に二十年代初葉の作家と作品についての、一通りの具体的な研究成果を提示するところから筆を進めていきたいと思う。

だが、これがすでに二十年代初葉の作家と作品とを中心としての研究なのである以上、ここに記述されたものの前に、新時代の文学として維新以来二十年間のそれがあったのであることは、云うまでもない。多くの文学史家によって、明治前期とか、啓蒙時代とか称ばれている時代のことだが、私は、それを後者のように称ぶのが一番妥当だと思っている。それを人々が新しく近代的な思想や物の見方をできるだけ身につけようとし、事実またある程度までは身につけた時代であったと見、そういう時代の特質をはっきりと表示するには、そういう称び方が最も適当だと思うからである。

ところで、本文にもその点多少は触れておいたとおり、そういう啓蒙時代二十年間の思潮とか文学とかいうものの流れは、まず明治初年の福沢諭吉や中村正直から十年代中葉の自由民権論者中江兆民などに至るまでの、いわゆる啓蒙思想家たちの活動にはじまるとともに、翻訳文学の氾濫から政治小説の成立流行にと向うかたわら、いわゆる新体詩の誕生などをも迎えるところまで行っていたのであった。見方によってはそこに近代日本文学の成立があったとも云えるのである。

また事実そうした翻訳文学や政治小説の流行につれて、新しく近代風な物の考え方が強く文学の表面に押出されて来るとともに、それまでの文学界の主な潮流であった戯作文学——江戸末期以来の伝統に立った戯作文学は漸次に影のうすいものになって、文学一般がもっと真面目に人生の事実に相渉ろうとするようになり、そこから本文中にも触れておいた「婦女の鑑」などにもつらなるような、問題と作者の積極的な対人生の主張とを盛りこん

だような作品が、比較的多くあらわれるようになったのであった。それだけ文学意識も変ったわけだし、そこに近代文学の誕生を見るのも決して失当とは云えないのである。

が、それにもかかわらずそれらの新文学は、まだ近代文学としての中枢的理念である写実主義とは関知せず、手法的にも近代文学らしい革新を経ていなかった。つまりその新文学性においてまだ未成熟だったのである。だからそれは題材や一応の形式において新時代の文学らしい性質を見せたのでありながら、まだ新文学としての魂が入りきらぬような趣を残していたのであった。そういう点への反省から、坪内逍遙の「小説神髄」を中心とした写実主義理論の提示となり、並行的に言文一致確立への努力が生れて、そこではじめて新文学を形成すべき要素が一通り出そろわされることになったのである。それらのものの意義が重く見られねばならぬ所以だが、そういうなかでも逍遙の「小説神髄」はことに劃期的な意義を持つものであったために、しばしばそれが新時代文学の「暁鐘」だったとも云われているのである。そうしてそれは一応は正にそのとおりであったのだが、しかしそう云ってもそれはまだ理論的にかなり大きな不備を残していたものであったのみならずそれが政治小説などに対する反省――それもかなり反撥的な反省から生れたものであったために、せっかく政治小説の獲得した人生社会の重大問題に相渉るという新文学としての重要な性質などをまで、知らず知らず拒否してしまうような結果になったのであった。それがせっかくの写実主義の提唱を、逍遙自身必しもそれを意識したのではなかったまでも、人世社会の重大事とは相渉らない、その意味で戯作的な末梢写実のそれにと傾かせてしまったのであった。だから彼自ら「小説神髄」の理論を実践して見せようとした「一読三歎当世書生気質」はその表題そのものがすでにある程度それを示しているとおり相当色濃い戯作性を孕んだものになってしまったのであった。翻訳文学や政治小説によって一応克服された戯作性が――古めかしい遊戯文学の伝統が、こうして新しい文学理論の提示と手をつないで、またある程度復活して来ることになったのである。それだけ、新しい理論やそれを生かすべき新しい手法の一応の提示はありながら、ほんとに旧殻を脱ぎつくした新しい文学は、この時代にはまだ生れ得なかった

のである。そう思うと、それは暁鐘であるよりもやはり新時代精神を身につけようとする啓蒙的努力の一つ――それの大きな成果の一つだったと見るのが、最も妥当な見解になるのであろうと思う。政治小説が新文学としてまだ熟しきれなかったと同じように、この時代に提唱された写実主義理論やその理論によって生れた作品の群にも、まだ近代文学にはなりきれない不熟さが多かったのである。ほんとに新しい近代文学は、そういう二つのもののそれぞれに残されていた旧いものを乗り越して、その二つのものを云わばも一つ高いところで止揚したところに、はじめて成立したと云うことになるのである。私が、上記のようなものの出た頃までを新文学成立期以前の啓蒙期だと考えている所以だが、それはとにかく、そういう脱けきれないものを脱ぎつくし、成就しにくいものを成就しつくすために、こうして多くの人々がいろいろに努力した二十年の歴史があって、その間には幾度ものつまずきや時には後もどりのようなものさえあった上での、二十年代初頭における近代日本文学の一応の成立があったのであることを、正しく知らねばならぬのだと思う。

こうして二十年代初葉に一応成立した近代日本文学は、その後、浪漫主義の時代、自然主義の時代等を経て、明治末年から大正期に入って、はじめてその成熟期に入るのである。

第一章　前浪漫主義の人々とその周囲

第一節　近代日本文学成立の契機

日本の近代文学は明治二十年代初葉に成立した。

それにはむろん当然の理由があったので、第一の理由としては新しい資本主義社会組織の一応の整備がまずあげられなければならない。武士家禄制度の廃止や土地私有権の確立によって、確実に資本主義的社会への基礎を置かれたわが国は、維新以来不断に続けられてきた政府の誘導と商工者流の努力とによって、重工業の発達こそ未しかったものの、軽工業中心の産業革命はこのごろまでにようやく一通り整備されるところまで来たのだという。だから歴史家のうちには明治維新の完成はだいたいこの二十年前後にあると説く人々もあるのだが、それはとにかく、文学は元来その時代や社会状勢との関連においてあるものなのだから、こうして新しい社会の状勢がととのってみると、おのずからその新しい状勢を反映した作品が生れ出て来ずにはいなかったのである。近代日本文学がこの期において成立したのも、そう思えば極めて必然の現象であったことが、容易に理解されるところであろうと思う。

のみならず、維新以来二十年の歳月を閲している間に、近代風な物の考え方や感じ方も、ある程度は人々のうちに根を下ろしていたのである。それが内から表現を求めずにいなかったところに、おのずから近代風の物の考え方を軸とした作品を誕生させる契機があったとも云えるのである。それが云うまでもなくこの期における近代文学成立の第二の理由であった。

ところで、一口に近代風な物の考え方といっても、それはむろん多岐多様で、かんたんには要約できぬけれども、その中枢にあったものは何と云っても人間個人を尊重する思想だった。並行的に、その人間の住む現実の世界や人間の営む現実の生活を尊ぶ思想だった。そうして、そういう思想と対応した文学上の方法としては、いわゆ

る写実主義の方法があった。人間や現実を尊んで、これを写すに足る価値ありと思うところに成立する方法である。

そういうことを知るために、この期より少し後の作品にはなるが、とにかく島崎藤村の「浦島」（明治三十三年、翌四年「落梅集」所収）という詩を調べてみよう。

浦島の子とぞいふなる
遊ぶべく海辺に出でて
釣すべく岩に上りて
長き日を糸垂れ暮す

流れ藻の青き葉蔭に
隠れ寄る魚かとばかり
手を延べて水を出でたる
うらわかき処女のひとり

名のれ〳〵奇しき処女よ
わだつみに住める処女よ
思ひきや水の中にも
黒髪の魚のありとは

かの処女嘆きて言へる
われはこれ潮の児なり
わだつみの神のむすめの
乙姫といふはわれなり

竜の宮荒れなば荒れね
捨てゝ来し海へは入らじ
あゝ君の胸にのみこそ
けふよりは住むべかりけれ

亀を助けたその酬いとしてというような道徳的勧懲的な特質は影も残さずぬぐい消されて、そのかわりに端的な恋愛感情が織り込まれていることその他、周知のとおりの浦島の物語とは、ずいぶんちがった性質が見出されるだろう。そこにこの詩のもつ近代文学的性格があるわけだが、云うちでも特にここで注意したいのは、「竜宮城の歓楽」などという仙境観念ないし異郷思慕の思想があとかたもなくなって、そのかわりに現世尊重の現実主義的傾向がほの見えていることである。「わだつみの神のむすめの乙姫」が、人の子浦島とともに生きること

を願うて、「捨てゝ来」た竜宮の荒れ廃ることなど、全然意に介しまいとしているのだから。何ものをも越えてこの現実の人生を尊び、したがって現実の生活に価値を見出している気持が、そう思えばそこに必しもおぼろげでなく打出されているのであることが知られるであろう。と同時に竜宮を極めて「よいところ」として描いている伝説や物語では、「わだつみの神のむすめの乙姫」は彼女が神（あるいは仙女）であるがゆえに、どうやら人間浦島より上位のものであるかに扱われているのに対して、ここでは彼女は浦島にすがりついて、その悶えを訴えるような、そんな位置におとされているかたちが見られるだろう。人間を絶対とする思想がおのずからそういう作為を生ませるので、そういう特質を持った作品の生れているところに、近代が人間とその営む現実の生活ないし人間の住む現実の世界を何よりも尊んでいたかたちが、はっきりと知られるのである。

だから、そういう特質を持った作品は、何も藤村や「浦島」にのみ限られていたのではなかった。「浦島」よりさらにも少し後の作品であった森鷗外の「玉篋両浦嶼」（三十五年）をみたまえ。これは二幕からなる戯曲だがその第一幕のはじめは、竜宮城の歓楽と刺戟のない平穏さとに倦み果てた浦島が、たいくつのあまり居眠りをしてしまっているところから書き起こされている。その居眠りの間に、昔漁夫であった時の自分があらしにあって難儀した時の様子を夢にみた浦島は、そうした緊張と自然征服の喜びを持つ人間（現実）生活こそ生きがいあるものだと感じて乙姫の恩愛をふりきって故郷に帰ることになるのである。

たいらかなるにも　やすきにも
ほどもこそあれ　わがむねの
さばかり悶え　もだえしは
この平和にこそ　よりつらめ。
さきに風波を　ゆめみしとき
身うちの血潮沸き返り
気も晴々となるほどに、
ひごろのうたがひ　やぶれしぞ。
色も香もある　おことを棄て、
ここのみやゐを　たちさらんは、
こころぐるしき　かぎりなれど、
おことは自然　われは人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com